■特集・小児精神障害の発達と転帰

働く自閉症者の生活様式の特性

小 林 隆 児

Japanese Journal of Psychiatric Treatment
Vol. 1, No. 2, Apr.
Published by Seiwa Shoten, Co., Ltd.

精 神 科 治 療 学
第1巻第2号 1986年4月 別刷
星 和 書 店 刊

特集——小児精神障害の発達と転帰

働く自閉症者の生活様式の特性

小 林 隆 児*

抄録：自閉症者の就労とそれによる精神的安定をめざすための治療的戦略を編み出すために，現在就労中の3例の自閉症者の日常生活の特性と職場での行動特徴の検討から以下の結論を得た。すなわち，働くことへの意欲は非常に強いが，彼らの強迫傾向が過剰適応を生みやすく，そのために適応の破綻をきたす危険性があること。器用でないため技術習得までにはかなりの時間がかかるが，一度身についた技能はかなり正確に発揮できること。コミュニケーションの障害を考慮した仕事の内容を工夫することや，自由時間をうまく使えるようになることが，彼らの精神的安定のためには大切であること。

このようなさまざまな生活様式の特性と職場での行動様式の特徴を示しつつも，仕事につくことが彼らの社会的成長の促進につながることから，われわれは彼らの就労のための条件づくりに努力する必要性があることを強調した。

精神科治療学 1；205-213, 1986

Key words: *life style, autistic adult, employment*

はじめに

従来自閉症児に対する検討はもっぱら幼児期から学童期の病態を中心に行われてきたが，彼らの加齢とともに思春期，さらに成人期における彼らへの理解と対応が問題になってきた[1,10,11]。自閉症児の長期予後は最近かなり明らかになってきつつある[6]が，その予後の改善は，自閉症児のもつ認知障害を基盤とするさまざまな障害に対するハビリテーションの重要性[8,12]もさることながら，年長になるにつれ残された精神機能の分化と発達に伴い，彼らが彼らなりに身につけていくさまざまな適応様式と強く結びついていることがわかってきた。彼らの自立への道を援助することが，われわれに課された今日の自閉症治療の当面の大きな課題であることを考えると，働く自閉症者がいかなる生活様式を身につけ，周囲の世界に適応しようとしているかを検討することは，彼らの就労を可能にしていくためにはぜひとも必要な作業である。過去にも追跡調査として成人期の自閉症者の病態は報告されてきた[2,4,5]が，ここでは筆者が長期経過観察をしてきた症例の中から，現在成人期に達し働いている3例の自閉症者の日常生活における行動様式の特性と職場での行動様式の特徴を検討し，彼らの就労に対する理解と援助の一助としたい。

I. 3例の発達歴と就労後の経過

1. H君の場合（男性 1957年1月生まれ 現在29歳）

本症例は就労後24歳時，職場で不適応を起こし精神病的破綻をきたしたが，入院治療とその後の

1986年2月4日受理

The characteristics of the life style of employed autistic adults.

*福岡大学医学部精神医学教室
〔〒814-01 福岡市城南区七隈7丁目45-1〕
Ryuji Kobayashi, M. D.: Department of Psychiatry, School of Medicine, Fukuoka University. 7-45-1 Nanakuma Jyonan-ku Fukuoka, 814-01 Japan

デイケアおよび外来治療により回復し，数年後に再就職した。この間の経過についてはすでに筆者が詳細に報告している[7]ので，今回は主として，その後の生活様式と行動様式の特徴について述べてみたい。

1）発達歴

父36歳，母31歳の時に出生。正常出産。3歳頃，多動で落ち着きがなく，視線が合わないことなどに気づかれ方々の病院を受診した。4歳から幼稚園に3年間通った。就学年齢時には知能も正常レベルに達し，小学校は1年延期して近くの小学校の普通学級に入学した。しかし，2年生になっても多動は一向に改善しないので，この年(1965年)2回，精神科に入院し，小児分裂病の疑いがもたれたが，はっきりした診断と治療もなされないまま退院している。その後学校に通い始めるが，友達とは遊べず，集団行動がとれない。勉強も時間をかけないと落ち着いてやれない。そのため成績はビリに近かった。特に国語は不得手であったが，算数はどうにかやれていた。壊れた時計を修理したり，機械類を壊して組み立てたりするのが好きで，とにかく独り遊びばかりであった。興味の偏りが激しく，昆虫の本をよく読んでいた。中学時代までほぼ同じような状態ではあったが，次第に落ち着きはでてきた。そして私立の某工業高校に入学した。しかし，友達はできないまま，学業成績もほとんど低いレベルであった。

2）就労後不適応を起こすまでの経過

高校卒業後，父の勧めで自衛隊に入隊した。入隊時，モールス信号の試験を受け，受験生の中でもトップレベルの成績をとるといった限られた側面の才能を示していた。ところがここでもやはり人との接触は極力避け，酒飲みを誘われても自分は酒を飲まないからといって断るといった孤立的生活様式であった。無駄遣いをすることもなく，給料はほとんど貯金し，4年間で当時の金額で350万円もため，無欠勤で4年間を過ごした。その後，某レストランで食器洗いの仕事についた。1年半勤め100万円ほど貯金をし，勤勉なところをみせていたが，1981年12月初旬，いままでと違って仕事がのろくなり能率が落ち，独言，空笑などが出現し，職場からも様子がおかしいと言われた。帰宅時間は次第に遅くなっていった。家の中ではトイレに行く回数が増えて，1回に十数分もかけてトイレに入っていた。元気な頃は毎週墓参りをして自分で買ってきた花を飾り，毎朝神様にお灯明をあげて出かけていたが，それさえしなくなった。そのためF精神病院に入院。4カ月で回復し，以後デイケアに通い，2年余りの治療経過を経て，1984年の春，父の世話で無事生菓子の製造工場に再就職することができた。

3）再就職とその後の経過

職場の従業員は彼の他に年寄夫婦と若い女性，さらに中年の女性の5名が1グループになって働いており，全部で20名程度の工場である。彼の仕事の内容はボール箱の組立や容器の洗浄などが主である。朝7時半に自宅を出て，8時仕事開始。午後6時終了。しかし，多忙の時は夜9時頃まで働くことも少なくない。通勤は朝父が車で送っているが，帰りは一人で歩いて帰る。途中デパートなどに寄ってちょっとした買物をしたり，本を立ち読みするのが楽しみである。ぜい沢品には全く興味を示さない。この頃，父に車で送ってもらっているのを職場の人に見られて，冷やかされた。するとA君は翌日から歩いて通勤すると言い出した。しかし，歩くコースがあまり合理的な最短距離ではなく，わざわざにぎやかな通りを少し遠回りして歩いて行っている。眺めを楽しんでいるようである。給料は5万円程度だったが，不満は示さない。洗い物は汚れがひどいので，つい念入りに洗い能率が悪く，そのためよく注意される。

趣味は暇ができたら熊本の温泉に一人で出かけること。パチンコを父が勧めても，「勝つことがないからしない」とギャンブル性のある遊びには興味を全く示さない。酒やビールも好まない。父が勧めてやっとビールを少量飲むようになった。年末，会社から頼まれクリスマスケーキを5つ注文し，会社から自分で持ち帰るように言われた。生真面目に自分1人で5つ全部さげて歩いて帰った。電話一本すれば父が車で迎えに来てくれることはわかっているようなのに，融通がきかない。

最初臨時雇いだったが，しばらくしたら本雇いにしてやるという約束だった。しかし，いつまでたってもそうならない。仕事は相変わらず長時間

で厳しい状況が続いた。半年たってやっと本雇いになった。しかし年末から正月にかけてほとんど休みなく働き，元旦と2日だけしか休みをもらえなかった。また，休みも定期的でなく，たまにしか休めない。こんな状態のため好きな温泉旅行も行けず，次第に疲労の色が濃くなっていった。休日が定期的でないことが一番こたえていた。強迫的性格のA君からすると予定が立たないことが精神的に大変苦痛のようであった。勉強して何か資格を取りたいとまで言い出した。疲労が重なってきたにもかかわらず，睡眠パターンは相変わらず几帳面であった。弱音は吐かない。疲労の色がかなり濃いので仕事を休むように職場から言われても自分が休むと他の人が困るからといって休もうとしない。外来通院に対する気持ちを聞くと，「薬を飲んでいる間，献血ができないのが残念。自衛隊に行っていたころ，献血を2lぐらいしていた。(献血の動機は)献血手帳があると親戚の人などが事故に遭ったとき助かるし，重症患者には献血が必要だから。だから薬を減らして欲しいと思う」などと薬を飲んでいることに対する抵抗をこのような形で表現する。「薬を飲んでいると，結婚できないから」などともいう。

こんな状態の時，自転車に乗っていて，自家用車と接触しはねられるという事故に遭った。顔面を路上に強打し緊急入院したが，2日間で済み，特に心配になるようなことはなかった。しかし，疲労による注意散漫が原因の一つであったことは確かなようだった。このころから次第に疲労度は強まり，時期が夏にさしかかる頃であったことも重なって8月の終わりには疲れ切った表情をみせはじめた。家に帰るとすぐにも眠りたい様子を示していた。ある日夕方無断でひとり外出し，翌日の昼まで行方不明になる事件が起こった。本人にあとから聞くとある温泉旅館に行って泊まってきたという。2度もこんなことがあったが，尋ねられても詳しくは語りたがらない。仕事を休んで家にいる時は自室に鍵をかけてしまい，家人と会いたがらない。どうも様子がおかしいので，ある朝父が車で送ってやった時，いつもなら会社の前まで送ってもらうのにその日に限って会社の数百メートル手前で降ろしてくれと要求した。様子がおかしいので隠れて見ていると，独言と空笑がみられたという。本人にあとから聞くと「昨日みた漫画を思い出していた」と説明していた。普段は職場の不満を少しは示していたのに，こんな状態になると逆に不満や困ることなどを尋ねてもすべて否認してしまう。家にいてもすぐに出歩く。夜遅くまでどこかに行っているが，尋ねても全く何も答えない。thioridazine 75mgから150mgに増量。仕事をしばらく休むように指示した。1週間後にはすっかり改善し，ハキハキ答えるようになり，疲労の気配はもう見られなくなっていた。食事，睡眠もよくとれるようになった。無断外出もしなくなり，家で一人のんびり過ごせるようになった。3週間後職場に復帰した。

1ヵ月後，また疲労が強くなったが，今度は本人から休みたいと言い出した。「二度とあんな風になりたくないから」と自分をかなりコントロールできるようになった。1週間でもとにもどった。今回の経験以来，どうも今の職場は休みが不規則であること，人並みな休日が取れないこと，もう少し給料が高くならないか，などといった不満をかなりはっきり言うようになってきている。

2. K君の場合（男性 1964年2月生まれ 現在22歳）

本症例は高校卒業後クリーニング店に勤め，4年あまり経過しているが，就職までの経過についてはすでに報告している[6]ので，今回は彼の職場や日常の生活様式を中心に述べる。

1) 発達歴

父31歳，母22歳の時の第一子として出生。両親とK君の3人暮らしで，父は会社員，母は主婦。3歳の時，自閉症と診断され，幼稚園時代は東京にまで転居して両親はK君の治療に打ち込んだ。6歳，この頃IQは普通といわれ，東京の小学校(普通学級)に入学。3年になって福岡にもどり情緒障害学級に週1回通いながら，普通学級に通う。5年生になってから不眠，強迫症状が増強してきた。小学校卒業当時は知能水準も中等度遅滞にまで低下してきた。

12歳，中学は特殊学級に入級。パニックがなかなかおさまらないので，13歳時1週間ほど当科に入院。母子の分離と薬物療法が効を奏し，不眠が

治まり，随分かんしゃくも減った。

16歳，養護学校高等部へ入学。母との身体接触を避けるようになり，K君は母親から心理的に離れていって，彼なりの自立の過程にあることを感じさせた。この頃，母は第二子を出産し，これを契機に母も心理的に安定し，母子の関係はそれまでの共生的な不安定な状態を完全に脱した。しかし強迫的性格は相変わらずで，服薬を忘れると，その分をごみ箱に捨てる。それは予定日にきちんと薬がなくならないと気が済まないからであった。

2）就労後の経過

19歳の春（1983年），Kクリーニング店に就職。毎朝規則正しく自発的に起床し，いつも決まったバスに乗り，必ずといっていいほど最前列の左側の座席に陣取り通勤している。最初の給料をもらうと，約4万円の給料のうち，1万円を自分の小遣いにして，残りは1万円を父に小遣いとしてやり，母には1万円を生活費として渡し，後は貯金するようになった。この時以来，現在まで給料をもらうと，必ず給料袋を家の仏壇に供えてお祈りをするようになった。働きだしてから，父から今までもらっていた小遣いを，父がまたやろうといっても，いらないといって断るようになった。父からみると，働くようになってから，態度が大きくなって，呼びかけても返事をしない時もあるという。また，今までに主張していたように，自分の好きな「読売新聞」を母に金を渡して購読するようになった。洋服も欲しがり，自分で買いたがるようになった。母がサーカスなどの遊びを勧めても，「行かない」と言って断るなど子供が見るようなものには関心を示さなくなった。妹にも時に土産物を買って帰ることもある。1年間で20万円貯金し，そのうち10万円をつかって念願のクーラーを自室に購入した。翌年，両親は年長自閉症児のための施設づくり運動をするようになったが，K君は施設のことを尋ねられると，「施設に入らない。お母さんが死んだら施設に入る」と言っている。自立しつつも，母親の存在についてはひそかに大切に思っているらしい。

就職して1年半たった頃，筆者は職場見学をさせてもらった。K君はいつものバスに乗り，目的地のバス停につくと，足早に職場まで走って行く。会社に着くと従業員に挨拶をするわけではないが，いつものように早速ラジオ体操をみんなで行っていた。他の人とテンポは狂ってはいてもK君はいたってご機嫌で終始にこやかな表情をしている。つぎに店長を囲んでの朝礼であった。まず社訓を皆一緒に読み上げる。おそらくその意味はわからないと思われるが，K君も一緒に声を出していた。これが終わってそれからが本番。要領良く着替えて首にタオルを巻き，元気に作業場に出ていった。K君の主な仕事は丸洗いされた衣類をプレスしやすいようにばらしたり，包装用のビニールを台にセットしたり，プレスされてでき上がった洗濯物にビニールをかぶせ，営業所別に区分けすることであった。K君もこの仕事を始めて半年近くになるため，最初に比べてとても能率は向上してきたと職場の主任は語っていた。K君がもっとも得意とする作業はでき上がった衣類の営業所別の区分けであった。これは大きな円形のハンガーに営業所の名前札が掛けてあり，その札と衣類にかけてある営業所名の札とをマッチングさせて並べていくというものであった。主任の話によれば，この作業だけは最初から全くミスはなく，念のためにチェックもしてみたが本当にどれひとつとして間違ってはいなかったという。そのため，いまではK君はこの職場では有能な存在とみなされ，病気で休んだりすると本当に困るらしい。何か他の従業員が困ることといえば，注意されたり，仕事がちょっと途切れて暇ができるとトイレに入ってしまい，2，30分は出てこないことだという。ちょうど筆者が見学に行っていたときにも，ちょっと仕事がなくなり暇を持て余してしまい，トイレに逃げ込んでしまうという場面に遭遇した。しかし，従業員の人々は慣れたもので余裕をもって対応していたため，特別混乱を助長させるようなことは起きていなかった。ずいぶんと広い空間に10人前後の従業員しかおらず，自分の持場をきちんと持てていることで他人との過度の接近とそれにまつわる緊張感は少なく，こうした職場の環境がK君にはとても合っているようである。時に失敗することといえば，シーツカバーを引っ張って伸ばす作業中，力を入れすぎて破って

しまうように，力の入れ加減をうまくコントロールできないことである。仕事の性質上，夏場は多忙で大変暑く，工場内は40度を越すという。さすがにK君も夏場は参って，しばらく食欲をなくしたりした。しかし数日間休んだだけで回復した。

仕事もなれて2年ほどしてから次のような事件が起こった。珍しくK君は体調が悪く朝からおなかをこわし，下痢気味だった。職場にはいつも通りに出勤したが，すぐに便意を催し，トイレに駆け込み用を足したが，あいにくその日水洗トイレのコックが壊れて水が出なかったらしい。そのため彼は慌てて工場のビニール袋を取ってきて，素手で便を掻き集め袋につめてごみ箱に捨ててしまった。その後しきりに手を洗っては臭いを嗅いでいるので，工場長は不思議に思い尋ねると，ごみ箱からおもむろに袋を取り出して持ってきたという。彼のあまりにも生真面目な行動にみんな笑ってことは済み，大事に至らなかった。かと思うと，きれい好きで夕方毎日入浴し，パンツを夜はきかえ，朝になるとまた必ず新しいものにはきかえる習慣を持ち，彼の強迫的性格の特徴がよく表れていた。

おしゃれには興味を示さないが，成人式には背広上下だけ自分で購入している。墓参りに毎週のようにでかける。親が忘れていると催促をする。日常生活はいつも規則正しく仕事以外の時間は好きな新聞を読んだりする他に，汽車に乗って旅行するのが最大の楽しみ。必ず土産物を持ち帰り，職場の人に渡す。その時はお茶まで出して振る舞っているという。日曜日に外出すると，外から必ず1回は電話し，今晩の食事は何かを尋ねるが，どうも母親の存在を確かめるのが目的らしい。

3. M君の場合（男性 1965年8月生まれ 現在20歳）

1) 発達歴

2歳下に妹がいる。父29歳，母28歳の時の子供。父は酒好きで，糖尿病。胎児期，特記すべきこともなく，正常満期出産。生下時体重3620g。新生児期も特に異常なし。頸坐3ヵ月，初歩12ヵ月。

乳幼児期，呼んでも振り向かない子だった。他児にも無関心。「おつむてんてん」や「いないいないばあ」などのジェスチャーはやっていた。言葉がなかなか出てこなかった。2歳になっても言葉がわからないようなので親も心配になる。落ち着きがなく多動で，よその家に平気で上がり込む。車を怖がらない。3歳，少しずつ母の言葉に理解を示してきた。しかし多動は変わらず，迷い子になっても寂しがらない。4歳，言葉の理解が少しずつ進歩したが，話し言葉は遅れる。他児への働きかけは一方的。幼稚園に入ったが，多動で先生のいうことを無視して外に出る。雨が降っても一人でウロウロしている。この頃からタクシーのマーク，バス停の標識に関心を持ち，何回も自分で書いて写す。卒園の頃になってやっと椅子に座っていられるようになった。

小学校1～2年，養護学校。母が送り迎えしていた。小学校3年，特殊学級に移る。奇声をまだよく出していた。1学期はまだ乱暴なところが目立ち，なかなか席には着かなかったが，送り迎えを母はやめた。この頃から次第に周囲の刺激がとても患児に合い，大変良い変化がみられだした。言葉がはっきりしてきた。落ち着いてきた。「ママ待って」「新聞が来たよ」などその場に合った言葉が自然に出るようになった。3学期，少しずつ他児とも遊べるようになった。小学校4年，こだわりがだんだん減った。偏食もなくなった。書字は大変上手で，県の書写展に入選するほどの腕前になった。本がすらすら読めるようになった。内容もわかってきた。10歳時の知能レベルはIQで70～80程度になっていた。

この頃まではおうむ返しがまだ時折みられ，「ただいま」と言わないで「おかえりなさい」と言うなど主客転倒も残っていた。11歳，言葉でのやりとりもできるようになる。

中学校，言葉の面では「したい」「いやだ」と言うなど，自分の意志をはっきり表明できるようになり，友達とも口論するようになった。英語が好きで，語彙をたくさん覚える。しかし，言葉は増えても応用がきかない。音読みと訓読みの区別が混乱しやすい。知らない漢字はほとんどないのに，文章の理解は小学校3年生並で，なかなか困難。興味関心が限られ，地図や旅行の本を好んで読む。人と関わりたい気持ちはあるが，自分から

うまく関わることができず，人からかまってもらってはじめてできることが多い。そのため，ある日クラスの仲間に，パンツを脱いで女子のクラスに行ってペニスを見せて来い，と言われ，その通りに見せてきたりするなど，他人の指示にあまりにも従順すぎて，学校でからかわれ，一時危機的状況になったことがあった。ゲームのルールも次第に学習する。碁を習うが，勝負の駆け引きを知らないので負ける。しかし，根気がでて，我慢がかなりできるようになってきた。母から和文タイプを習い，かなり打てるようになる。工作などきれいに仕上げる。ただ時間がかかる。

養護学校高等部入学。言葉は着実に進歩。高校生になってから，どんどん表現力が伸びてきた。「ああ，だめだった」「お待たせしました」「ちょっと待って下さい」など言えるまでになった。しかし，空間位置を示す言葉「横・前・左・右」などの理解がまだ困難。時間の概念も不確か。昨日・今日・明日などの使い方がまだ適切でない。来年といえばいいところを「1985年」と言ったりする。しかし，忘れものをするようになり，強迫的な面がすこしずつ和らぎ，こだわりも減った。言葉に感情がこもるようになった。競争心も芽生え，頑張りがとてもきくようになった。褒められると喜ぶ。品行方正を好み，人からからかわれたりすると，「…君，やめなさい」と注意する。いつもいい子でいたがる。

中学校時代にいじめられたような嫌な状況が再現されると，イライラして「救急車が来る」「病院に入院しなくてはいけない」などと言ったりして，被害的な反応を起こす時期がしばらく続いた。しかし生活時間が急に変更になっても，不安を起こさず，変化にこだわらなくなってきた。

2)　就労後の経過

18歳の春（1984年），博多人形の工場に就職。人形の型作りの作業が主。力仕事だが，かなり仕事の手順はむずかしい。教えられるとスムーズに覚えていった。体力もあり，根気が続く。挨拶もきちんとする。しかし，力の入れ具合に変化を持たせるのが困難で，全身に力を入れすぎる。注意されると，大変気にし，なんども自分のほうから「……しますね」と確認するといったこだわりが見られる。このことが一番目につくが，他は全く合格点をつけられる仕事ぶりで，社長も彼を高く評価している。給料は時間給200円で，1ヵ月およそ4～5万円の収入である。

通勤は自宅から途中まで路面バス。あと会社のマイクロバスに便乗させてもらって会社にでかけている。勤務時間は8時半から5時までで，日曜祭日は休み。筆者も通勤に同じバスになることが多く，あとから筆者が乗ってくると，大きな声で「おはようございます」と張りのある声で挨拶する。降りる時もいつも一緒になる福大病院の職員に「いってきます」と挨拶をして降りる。最初は戸惑っていた職員も，次第に慣れ，今では相手方も「いってらっしゃい」と互いに挨拶を交わすようにまでなった。いつも最前列の左が指定席。そこがつまっていて他の席にすわっていても，空いたと思ったらすぐに席を代わって最前列の指定席にすわりたがる。その席に座っている人が降りるのを待ち構えている様子。ある日他の席に座り，筆者が横に座って話をしていたにもかかわらず，指定席が空くとすぐさま私をかき分けて移動する。座る場所への執着は大変強い。しかし，指定席が空いていなくてもパニックを起こしたりすることはない。

ある日の夕方，マイクロバスから乗り換えて乗りこんだそのバスにちょうど筆者が乗り合わせていた。彼が乗り込もうとした途端に大きな声を出したので，何事かと思ったら，乗り遅れそうになって遠くから走ってきた女性を見て，運転手に「待って」と言いたかったらしい。このように周囲に対する気配りを少し突飛な行動で表すことが多い。善良で正直な性格で，羞恥心とか遠慮といった感情はなく，いいと思ったことは素直にする。

毎日の楽しみは，タクシーのマークを見て書き写す。高校野球のシーズンが始まると，校章のマークを新聞でみつけ，書き写す。書いたものは大切にし，誰にも見せたがらない。小さいときからこの傾向は続いている。

Ⅱ．自閉症者の生活様式の特性

以上述べてきた3例はともに高校卒業後就労し，自閉症児の中ではかなり順調な経過をたどっていると考えられるものである。その中でH君は職場不適応で精神病的破綻を一時的に来し，その後の治療経過中も再び危機が訪れたが，どうにか破綻を食い止めることができている。K君とM君は就労後極めて順調な経過をたどっているが，これら3例の就労後の行動様式を検討すると，彼ら独特の適応様式が存在するように思われる。以下具体的に検討してみよう。

1. 働くことへの意欲は非常に強い

3症例にまず共通する最も顕著な特徴として，働くことでもってそれまでの学校生活時とは打って変わって意欲が増し，自己評価を高めていることがうかがわれる。K君は学校を卒業し成人になったら働かねばならないこと，よっていつまでも親に甘えてはいけないという気持ちが強いのだろう。就職した途端に，親からの小遣いを拒否し，逆に親に少ない給料から借しげもなく逆に小遣いを渡している。H君でも残業を自発的に行ったりしている。彼らは何故ここまで働くことに執着するのであろうか。学校生活場面ではなかなか自己評価を高められるような体験に乏しく，学業の面でも学習障害のために自己評価を傷つけられることが多い。しかし，働くことが本人の能力の範囲を越えていなければ，身体を動かすことにより自分の存在感をもつことができると同時に，自己評価を高めることができるのであろう[3,9]。ある枠ができるとかたくなにそれにこだわる自閉症特有の行動様式がここに現れている。

2. 過剰適応が破綻を招く危険性がある

H君の職場不適応の原因として，自分の行動様式を周囲から非難されたりしたことが，大きく関与していることはすでに報告した[7]が，その後の再度の危機状況とその際の反応を見ても，過剰適応が自分を追い込み，柔軟な対応ができないために，疲労状況をつくっていることがわかる。休みを適度にとったり，何かを省略するとかができず，ついつい自分を追い込んでしまう結果になっている。職場の周囲の人がこうした彼らの個性を認めて支持してくれる環境であれば過度な適応も評価が高いが，周囲がこうした点を認めてくれない場合，それは本人を追い込み，自分を保つための強迫的防衛様式に駆り立て，ついに精神病的破綻をもたらすことになる。K君の水洗トイレでのエピソードも彼らのもつ過剰適応の一側面を表している。バケツに水でもくんできて流すといった機転も働かず，かといってそのまま放置することはできない心理状態になるのだろう。

このような行動様式は何から学んだのであろうか。自閉症児の思考様式の特徴として善悪の判断が非常に強く，そのため悪いとされる行動は決してしようとしない面がある。○×思考型で×を極端に嫌うところにもそれがうかがえる。自我心理学的にいえば，生後ごく早期に芽生えてくるとされている自我の発達は弱いが，その後しばらくしてから発達していくとされる自我理想が極端に肥大化しているといえよう。こうあらねばならないといわれることに執着するのはそのためであり，強迫傾向はこれを防衛する所産であるといえよう。よってこうした行動特徴を彼ら特有の適応行動様式として理解していくことが大切である。確かにこうした彼らの行動様式の特徴が適応の幅を狭いものにしていることは否めない事実であるが，われわれはこうした行動のポジティブな面を積極的に生かしながら，彼らが追い込まれないようにするために，彼らの疲労度を判断し，疲労状態をつくらないような労働条件づくりをすることが大変重要になるであろう。

3. 器用でないので技術習得には時間がかかる

自閉症児は一般に言語発達の大きな障害をもつとともに，模倣能力の障害に基づく社会適応技能の習得の困難性をも合わせ持っている。そのため働く場合のさまざまな職業上の技能習得にも困難を伴い，3例とも作業で力の入れ加減をうまくコントロールできないといった感覚運動統合機能の障害を思わせる面が残ってはいる。しかし，時間をかけて，ある限られた領域の技能にしぼって教

え込むと，一度獲得さえすればかなり正確に実力を発揮することができることをこの3例は教えてくれる。その場合，彼らの知能構造上の特性を十分把握することが大切であることはいうまでもない。

4. コミュニケーション障害と職場での対人関係

最も困難を伴うのがコミュニケーションの問題である。職場の人々がこうした特徴を十分に受け止めることが望まれるとともに，H君は皿洗い，K君はクリーニング，M君は人形づくりといったように，仕事の内容も言語能力をあまり必要としないものを与えるように工夫することが重要なことはいうまでもない。

5. 自由時間をうまく使えることが大切

自閉症児の社会適応を占う意味で，自由時間をいかにうまく生かす生活様式を獲得するかという点は非常に重要で，Shopler, E. と Mesibov, G. B. (1983)[10] も強調している。ここでの3例をみると，本能満足に近いものをこうした自由時間に獲得することができることが生活を安定させている。H君は温泉への一人旅，K君は新聞をながめたり汽車に乗っての一人旅，M君は記号への執着というようにその内容はさまざまではあるが，その大部分は学童期または幼児期から非常に強い興味関心を持っていたものである。このように彼らが精神的安定を保つためには，一人になってこうした興味を充足する時間と場を保証することも大切である。

6. 金に対する欲は少ない

H君やK君にみられるように，ぜい沢やおしゃれなどにはほとんど興味を示さず，堅実に貯金している。給料が少ないことだけをとって不満を述べることもほとんどない。しかし，給料をもらうこと自体はうれしく，社会人としてのアイデンティティがそれにより保たれているようである。

7. 親に対する意識

自閉症児が思春期を乗り越えていく過程で，いかに親（特に母親）との分離をなしとげるかがその後の彼の社会適応を左右することはすでに報告した[6]が，K君をみていると，決して母親を拒否しているのではなく，その存在の大切さを感じていることは行動の端々にうかがわれる。母親が病気をした時の反応や，外出した時の電話などはその証明になろう。さらにH君が就職を焦る理由として，親が年をとってきたので早く仕事をして迷惑をかけないようにしたいと述べていることもその一つであろう。

8. 自分の将来像をどのように描いているのだろうか

自閉症者は生きていく技法を社会生活の中で自然に獲得するということが非常に困難である。そのため常に加齢とともにその世代の適応行動様式を学習しなくてはいけないことが多い。当面近い将来の問題となる結婚については，3例の中で最も知的レベルが高いH君でも，ほとんど具体的に問題となることはない。3例をみても情緒的関係をもつことは非常に困難であり，また回避することでもって安定を保っていることを考えると，結婚は極めて困難と言わざるをえない。よって今後いかに年をとっていくかは将来の大きな問題として残されている。

以上，現在就労中の自閉症者3例の生活様式の特性を検討し，次のことを学んだ。すなわち，自閉症者にとって仕事につくことは社会的成長の促進につながること。したがって，彼らが仕事につけるための努力を治療者も積極的に行わねばならないこと。さらに，就労とそれによる精神的安定をめざすためには，自閉症者の日常生活の特性と職場での行動様式の特徴をよく検討した上で，治療的戦略を編み出すことが必要であることを痛感した。

Ⅳ. ま と め

自閉症者の就労とそれによる精神的安定をめざすための治療的戦略を編み出すために，現在就労中の3例の自閉症者の日常生活の特性と職場での行動特徴の検討から以下の結論を得た。

(1) 働くことへの意欲は非常に強いこと。

(2) しかし，彼らの強迫傾向が過剰適応を生み

やすく，そのために適応の破綻をきたす危険性があること。

(3) 器用でないため技術習得までにはかなりの時間がかかるが，一度身についた技能はかなり正確に発揮できること。

(4) コミュニケーションの障害を考慮した仕事の内容を工夫することが大切であること。

(5) 自由時間をうまく使えるようになることが彼らの精神的安定のためには大切であること。

(6) その他の特徴として金に対する執着がみられないこと，親とは一定の距離を保ちながらも大切であるという意識は強いこと。

このようなさまざまな生活様式の特性と職場での行動様式の特徴を示しつつも，仕事につくことが彼らの社会的成長の促進につながることから，われわれは彼らの就労のための条件づくりに努力する必要性があることを強調した。

本研究の一部は福岡県自閉症治療研究事業委託費（班長村田豊久）によった。

最後に貴重な御助言及び御校閲をいただきました西園昌久教授ならびに村田豊久院長（村田クリニック）に深謝致します。

文　献

1) DeMeyer, M.K.: Parents and children in autism. John Wiley & Sons, New York, 1979.
2) DesLauriers, A.M.: The cognitive-affective dilemma in early infantile autism: the case of Clarence. J Autism Childh Schizophr 8: 219, 1978.
3) Dewey, M.A.: Parental perspective of needs. (Shopler, E., Mesibov, G.B. (eds.): Autism in adolescents and adults. Plenum, New York, 1983.)
4) Kanner, L.: Follow-up study of eleven autistic children: originally reported in 1943. J Autism Childh Schizophr 1: 119, 171.
5) Kanner, L., Rodriguez, A., Ashenden, B.: How far can autistic children go in the matters of social adaptation? J Autism Childh Schizophr 2: 9, 1972.
6) 小林隆児：自閉症児の精神発達と経過に関する臨床的研究．精神経誌 87：546, 1985.
7) 小林隆児：24歳の1自閉症者の精神病的破綻．児童青年精神医学とその近接領域 26, 1985（印刷中）.
8) Levy, S.M.: School doesn't last forever; then what? Some vocational alternatives. Shopler, E. & Mesibov, G.B. (eds.): Autism in adolescents and adults. Plenum, New York, 1983.)
9) 中根晃：自閉症の臨床—その治療と教育—．岩崎学術出版，東京，1983.
10) Shopler, E., Mesibov, G. B. (eds.): Autism in adolescents and adults. Plenum, New York, 1983.)
11) 若林慎一郎，水野真由美：年長自閉症児・者の処遇について．小児の精神と神経 15：213, 1975.
12) 山崎晃資：小児自閉症—社会復帰の諸問題—．社会精神医学 5：180, 1982.

第5回 青年期精神医学研究会

○日　時　昭和61年8月30日（土）

○会　場　愛知厚生年金会館
名古屋市種区池下町2－63

○演題募集　（締切—昭和61年4月15日）800字程度の発表要旨を世話人宛お送り下さい。

○連絡先　世話人代表　　清水將之

〒467　名古屋市瑞穂区瑞穂町
名古屋市立大学病院精神科
電話（052）851-5511